
ベン・トー丸富ルート（仮題）

利怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベン・トー丸富ルート（仮題）

【Nコード】

N0434Y

【作者名】

利伶

【あらすじ】

丸富ルートとは銘打ってますが、佐藤が通うのは烏田高校です。こう、フラグ的な意味での丸富ルート
てか、佐藤と著我をもっといちゃこら（死語）させたかったんだ

「この、佐藤のバカ、バカ、落伍者、成績不良、底辺、負け犬、敗北主義者……」

二月も末、とある一軒家の一室に二人の男女——いや、年の頃を考えれば少年と少女がテレビ画面と濃いグレーのボディを持ったゲームハードを前に、コントローラーを持って肩を並べてその部屋の主のものであるベッドに腰を下ろす。

方や黒い髪に黒い瞳、体の線はやや細めだが造形はこれといって特徴もなければ覇気も無い平均的な今時の日本人の少年と、方やボサボサながらも従弟である隣の少年がよく形容する偽物のような鮮やかな金髪と碧眼というイタリア人の母が持つ遺伝子を強く受け継いだ少女。

「この、佐藤のバカ、バカ、落伍者、成績不良、底辺、負け犬、敗北主義者……」

視線はそのままに、彼女が続けざまに、搾り出すように繰り出す罵倒を佐藤と呼ばれた『彼』は困った顔をしながらも甘んじて受ける。

それが彼に唯一できる謝罪の形だった。

ゲーム画面を見ながら、『彼』は床に投げ捨てられるように転がっているそれを視界の端に収める。それは一通の封筒。そしてその中に納められているのは烏田高校の入学試験の合格を旨とする数枚の書類。

これこそが、彼女が荒れている理由だ。

それはとある一件で露呈したあまりよろしくない生活態度によって、彼が当初予定していた某友人の犠牲によって得た推薦入試枠がふいになつてしまつて少女と共に丸富大学付属高校に一般試験で挑むも彼のみが不合格。そのため後日行われた烏田高校の一般入試を滑り止めとして受けたものの、私立と公立の試験日程の違いゆえ烏

田高校の一般入試日は丸富大学付属高校の二次募集の試験の日付とブッキングしており、彼はより狭き門となった二次募集より若干ランクは下がる故に安パイである烏田高校の試験を受けこれに合格。だがこの判断に声を荒げたのがこの少女。

てつきり自分と同じ学校に行く為に再び丸富を受けたと思っていた彼女は、この合格通知を見て今のように罵倒を繰り返している。

うーん、どうしたものか。

従姉である著莪の罵倒を受けながら僕はほとんど困惑していた。

丸富を落ちた時も散々罵倒……主にバカにする方向で受けていたが、今回のそれは違う。なんというか、本当に腹を立てているのと同時にどこか泣き出しそうな響きがある。著莪道15年と10ヶ月強の僕ならそれがわかる。

だけど、その理由がまったく分からない。高校受験に成功したところだから、例え僕持ちであろうとお祝いで豪遊しようなどと著莪なりに祝ってくれると思ったのだが、返ってきたのは絶え間ない罵倒の言葉。

一度は胸倉を掴んでものすごい剣幕で怒鳴ってきたが、それでも帰らないのは合格を告げたのが僕らがゲームをしながらだったからか、ゲーマーとして途中でゲームを放棄することが出来ないゆえか……かく言ううちの親父もかつて……いや、この話は今はどうでもいい。

とにかくなんで怒っているのかわからないと謝りようがないので素直にそれを聞いてみる。

「なあ著莪、何でそんなに怒ってるんだよ」

「なんでって……」

そう一度絶句しながら著莪は、なにこいつバカな事言ってるんだ？いや、バカだったか。見たいな顔をしてこっちを見てくる。バカは貴様だ、ゲーム中によそ見るなよ、ほら一機死んだ。

「だってあんた、別々の学校で……それに寮に入るつもりなんですよ？」

たしかに著莪の言う通りだが、丸富と烏田はその気になれば徒歩で行き来できる距離だし僕が一人暮らしをしたいと言っていたのも丸富を落ちる前からのことだ、それこそ今更なのに、それらがまるで人生の岐路のような、もう二度と交わることはない道に立ったかのように悲壮な表情をして怒るんだ。

だから、本当にわからない。著莪が何故そんなに怒るのか。住む場所が離れて学校が違っただけで何が変わるんだよ。その事を僕は正直に口に出す。こういう時は多少たどどしくても下手に言葉を飾るより著莪には通じるはずだ。

「……………」

その問いに、思っていたような畳み掛ける反論が無い。

どうしたことかと著莪を窺い見たら、著莪に椅子代わりにしていたベッドに押し倒された。

「ちょ、馬鹿お前なにしゃがる……！」

先程とは代わって今度は僕が著莪に怒鳴りつける番だ。

正直著莪に押し倒されたことなんてどうでもいい。これがクラスのマドンナである広部さんならまだしも著莪なら……フツ。ってそうじゃない、コイツせつかくマッスル刑……じゃなかった、ダイナ

マイト刑事だ。いかん、まさかこの僕がセガハードのソフトの名前を間違えるなんて、変な電波が混信したか？いや、著莪の態度のギヤップに思いのほか驚いたのか？つていやいや今はそんなことどうでもいい。せつかくもうすぐ最終ステージだったのに電源を切りやがって！

「別に、ちょっとこうしたかっただけ」

そう言った著莪の声と、僕の顔のすぐ隣にある横顔は喜色に満ちていて僕はなおも続けようと思った追求の言葉を飲み込む。

「あ、でも」

両腕を伸ばして上体だけを上げて顔を覗き込んでくる。

「丸富行かなかった罰は、ちゃんと受けてもらうんだからね」

罰ってなんだ。僕は高校浪人しなかったただけだぞ。

で結局はというと、著莪にあることを約束させられた。

それは著莪と学校近くのマンションでルームシェアすること。元々僕は実家から離れられればそれでよかったのだが、著莪が言う場所はどこらかといえは丸富に近い立地で当然寮に入ると比べればずっと距離は開いてしまうのだが、未だによく理由はわからないが著莪が懸念していた離れて暮らすという問題が解決してそれでいいつが納得するならばと、了承した。

「この、佐藤のバカ、バカ、落伍者、成績不良、底辺、負け犬、敗北主義者……」

女の子と同棲するのに上から目線で妥協する佐藤さんマジパネエ

感想お待ちしております

「とはいえ、こうして学校の周囲のスーパーを巡って食料品の値段のチェックを

4月となり僕が烏田高校に入ってからそろそろ二週間、最近著莪がおかしい。

元々突発的に変なことをしでかすヤツなので、おかしいという事自体は然しておかしくはないのだが、それとは別のベクトルのおかしさで……なにを言ってるのかわから無いと思うが、僕もだんだんにを言っているのかわからなくなってきた。

ともかく、どうにも最近ヤツはよく生傷を造って家に帰ってくる。著莪は最近行き始めたというバイクの教習所で転んだからというが、僕より早く自転車の補助輪を取ったお前が言っなよという話だ。まあ、その辺りはともかく、目下の問題として教習所通いで帰宅が遅くなっている著莪が最近はスーパーで弁当を買って食ってから帰ってることが多くなっているので、せっかく取り決めた食事の当番が一向に機能していないということだ。気をつけないとこのまま僕がずっと飯の仕度をしなければならなくなってしまうそうで、油断なら無い。

「とはいえ、こうして学校の周囲のスーパーを巡って食料品の値段のチェックをしてる僕も、業が深い……」

半ば以上強がりで呟いてから、放課後から学校の周囲にあるスーパーに片っ端から日用雑貨並びに食品類の値段のチェックをしてまわり、最後の「ホーキーマート」という男子学生寮の近くのスーパーを訪れたのは、そろそろ8時にもなろうという時間だった。

「著莪じゃないけど、今日はここの弁当でいいかなあ」

今日も今日とて著莪は晩飯を食べてくるといふ連絡を受け、この

時間からわざわざ僕一人分の食事の用意をするのも面倒なので、野菜や雑貨の値段をチェックしつつ惣菜コーナーへ足を伸し——そして歩みを止める。

その直後、僕の目の前を一人の女子高生——制服的に僕の通う烏田高校の制服を纏った人物が、そのまま足を勧めていたら直撃していたであろうコースを突っ走っていく。

そのすれ違い様に彼女は驚きの表情を浮かべていた気がするが、それよりも彼女が向かった先で巻き起こっている光景に目が奪われ、ぶっっちゃけそれどころじゃない。

「なんだ、あれは……」

誰ともなしに呟いた問いは当然答えるものも居らず、ただ勝負の——そして勝者と敗者の行方のみを呆然と眺める。

そう、半額シールの張られた弁当を手にしてレジに並ぶ者と、おにぎりや惣菜を掻っ攫っていく者を——って、僕の晩飯！

いけねえ、呆然と眺めている場合じゃない。

すっかり晩飯を作る気分じゃなくなっているし、空腹度合いからしてもここで食料の確保できなければなにか負けた気がする！

そう意気込んで僕はラスト一個となったおにぎり（紀州梅）に手を伸ばす！

僕のおにぎり（紀州梅）に伸ばした右手は、はしっ、とその右手を取る。

ん？文法がおかしい？いやいや、間違っていないとも。僕の手の下に、僕より若干早く左側から伸ばされたうちの学校の制服を着た女子生徒の右手がおにぎり（紀州梅）を手に使っていたから、必然的にやや遅れた僕の右手は彼女の右手をゲットしていたのである。

100円おにぎり（紀州梅）オン・半額シールから始まるロマンスも悪くないかも知れないと一瞬意識を逸らしていたら、なんか猛然と手を拭かれ始めた。

一体どうなってるのさ。と思いながらも苦し紛れに周囲に目をやると、先ほど僕の目の前を横切っていた女子生徒が、おそらく弁当の入った買い物籠を片手に無表情でこちらを見ている。

「……………」

「？」

距離も離れてるし、おそらく彼女自身独り言で呟くようにしたからかなに言っているかわからないが、彼女の口が何か言葉を放ったのだけ見て取れた。

「あの、サイトウさん」

「いや、サイトウじゃなく佐藤ね、佐藤」

「あああ、さっき聞いたばかりなのにすいません…………えっと佐藤さん、種要ります？」

「いや、別に……………」

あれから白粉花と名乗った少女と何故か二人で近くの公園でどん兵衛をそれぞれ買って、おにぎりを二つに分けて食べるということになった。公園で二人で食べる理由はおにぎりを二つに分ける為なので、何故さつき何故かと言ったのが非常に悔やまれる。

「…………なあ白粉、おまえはあそこで何が起きてるのか知ってるか？」

お互い無言でどん兵衛をすすりんがらおにぎりをかじるが、流石

に会話がないことに息苦しさを感じて話しかけようと思ったが、初対面の相手と共有できる話題なんてそれほど多くない僕は、おそらくどん兵衛の味以外で唯一共有できそうな先ほどあの場所で起こったことについて聞いてみることにした。

だが白粉もあの場に踏み込む一歩手前で傍観していただけのようで、結局僕が知っているようなこと以外は知らないらしく、結局謎は謎のままだった。

「ただいま……」

次の日、僕は帰宅するとそのまま共有スペースであるリビングのソファーに一直線で向かい、うつぶせにぶっ倒れる。

「おかえりー、遅かったな……ってちょ、佐藤どうした!？」

すでに帰宅していて、僕から見てソファーの奥に座ってゲームをしていた著者がちょうど自分の脇に倒れてきた僕に驚きの声を上げるが正直それどころじゃない。

昨日なにが起きたかもう一度確認してやると意気込み同じ時間帯にスーパーに向かうと、同じことを考えていたらしい白粉と合流して昨日のように弁当コーナーへ足を踏み入れた。

そこで気づいたことは、あの場にいた者たちは皆半額シールを張られた弁当を狙っていることと、昨日僕の目の前を横切ったのが『氷結の魔女』と呼ばれていたらしいこと。そして、彼女の掌底の威力は僕を二時間ほど気絶させるだけの威力を秘めていたということである。

「とはいえ、こうして学校の周囲のスーパーを巡って食料品の値段のチェックを

主夫佐藤

二話目にして、早くもいちゃついてないだと……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0434y/>

ベン・トー丸富ルート（仮題）

2011年11月15日14時37分発行